



ゆたか福祉会キャラクター
ゆたかめくとみらいちゃん

障害者の ゆたかな未来をめざして



「さくら」
まーぶる 有馬 清高さん
※紹介が11ページにあります。

CONTENTS

- ▶ 私たちの実践 リハビリテーション委員会の活動 P2～3
- ▶ 2.10 職員研修 P4～6
- ▶ 2024.1.1 能登半島地震 この「声」を届けよう！ P8～9

2024年3月10日 毎月1回10日発行 一部200円（法人会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます）

発行 / 社会福祉法人ゆたか福祉会 〒457-0852 名古屋市南区泉楽通四丁目5番地3
TEL 052-698-7356 FAX 052-698-7358 <http://www.yutakahonbu.com/>



愛知県ファミリー・
フレンドリー・マーク

ゆたか福祉会

検索

シリーズ

私たちの実践

リハビリテーション委員会の活動⑧

～利用者のいのちとねがいを大切に、社会への参加とゆたかな暮らしの実現をめざして～

1. 人間らしく生きる権利の回復とは？

これまで8回に渡りリハビリ委員会の活動報告をしてきましたが、最終回である今回は理念に基づいたりハビリ実践について報告します。

かつての医療モデルでは障害の重度化、高齢化による身体機能低下は、治療やリハビリで克服するものであり、それが無い限り生活レベルの維持は出来ないとの考え方でした。

しかし、現在のリハビリは機能訓練も実施しますが、訓練で課題を克服することを目標にしてはいません。たとえ機能回復が不十分でも、車椅子や歩行器を使用すれば移動が出来る、適切な食事形態や環境を整えれば食事が出来るといように様々な技法、手法を活用して自分の力で日常生活動作ができるように支援します。リハビリ委員会では日常生活動作をリハビリと捉え、利用者が主体的に生活するうえで必要な身体機能を維持する「生活

リハビリ」に取り組んでいます。

自分のしたい活動に参加して、住みたい場所で生活する。その思いを中心に、個人、医療、福祉、社会のそれぞれが果たすべき役割を認識し、生活支援を前提とした幅広い視点で考える。身体機能の改善だけでなく、精神面、社会への参加、人との繋がりなど、その人らしく生きる権利の回復Ⅱ「全人的復権」を目指した活動全てが「リハビリテーション」となります。



おすしが大好きでした

2. 利用者から学ぶことを大切に

「パターナリズム」という言葉があります。相手の利益のためには、本人の意向にかかわらずなく生活や行動に干渉し、制限を加えるべきであるという考え方です。「誤嚥性肺炎になると苦しいのは利用者自身だから、自分で食べたくても介助すべき」「転倒して骨折すると寝たきりになるから、安全のために車椅子を使うべき」。職員が利用者を困らせている、人権侵害をしているなどと言うつもりはありません。むしろ一生懸命に、利用者のために熱心に仕事に取り組んでいるだけだと思います。

私には忘れられない利用者があります。2014年まで利用していた良浩さんです。当時の私は「誤嚥するから食事は自分で食べてはいけません」「夜間に起きてきたらケガをするので、寝てください」…そんな言葉をよく言っていた記

憶があります。

勿論、本人の気持ちに寄り添った支援をしていたつもりです。しかし、当時の管理職に「もう限界です。誤嚥性肺炎を繰り返すので、口から食べるのは無理。安全のために、他の施設を探してください」と訴えて、他施設へ移るきっかけをつくったのは私。しかし、医療支援を受けられる施設に移り、胃瘻造設をしましたが「3か月後に亡くなられた」と聞いた時、私の頭には後悔の念しかありませんでした。葬儀場への移動の際、良浩さんの兄が職員とお別れの機会として希望の家によっていただいた時にお顔をみるのが精いっぱい。どんな顔で送ったらよいか分からず、葬儀も行けずじまい。

あれから10年。今、私の実践の基礎となっている「制限はしない」「出来ないと言わない、こうすれば出来る」と考える「施設は職員のためのものでない、人生の主人公は利用者」「結果責任が怖くて出来ないのであれば、責任は自分が全部負う」「リスク回避のために制限した生活で命を長らえるより、充実

した人生の方が大事」はすべて良浩さんから私に出された宿題だと思っと思っています。

私は2011年にゆたか福祉会に入職しました。この間亡くなられた利用者は16名で、7名は施設で看取りました。2016年より所長に任命され、作業療法士に加え、理学療法士、障害福祉では配置基準にない言語聴覚士を配置。栄養士に加え管理栄養士を配置して、食生活の充実と健康増進を推進する体制を強化。

かつて私が良浩さんに強いてしまった「私が考えるあなたのため、安全のための制限だらけの生活」でも「安全のために、住み慣れたここではなく他施設へ」でもなく、「あなたが考える、あなたらしい人生」の実践を利用者の人生から学び積み上げていく。リハビリを介助の手順、技術に着目した単なる業務改善の技法ではなく、全人的復権を目指すリハビリの理念を取り入れた、その人らしく生ききる実践に取り組む。

他者の考える最善は、その人の願いと一致しているとは限りません。人生の主人公は利用者自身です。

3. うずを作って多くの職員を巻き込んだ取り組み ⇨多職種連携を通じて

ゆたか希望の家初代所長である鈴木峯保さんは、私たちに様々な言葉を残しています。

「一番権利を侵害されているのは仲間」「なぜ、仲間がそんな行動をするのか考えなくてはいい。仲間のせいにするのは職員の努力不足」「仲間にはそうするだけの理由がある。それを無視して、職員の価値観を押し付けてはいけない」「仲間のせいにしたら、実践が深まらない。必要なのは職員の対応力を上げること」「管理職からの指示でなく、誰か一人が取り組むのでもなく、うずを作って多くの職員を巻き込んだ取り組みが必要」「経験しなければ世界は広がらない、やってみてからどうカバーするかを考えればよい」

利用者を「困った人」ではなく、「困っている人」と捉える。足力が弱くなり、立つことが難しいためトイレ介助が必要と考えるのは職員。手順、手法を決めるのは業務。しかし「職員にトイレを手伝ってもらい恥ずかしい」

「出来れば一人でトイレに行きたいのに」と困っているのは利用者自身。

嚥下能力が低下して、食事を摂るのが難しくなってきた利用者。職員にすれば、健康のために完食してもらわなければと焦り、介助という業務が増えて、時間がかなり人手不足も相まってより困難な状況になる。「ここでは活動や生活が難しい」「専門性のある施設に移ったほうが良い」「負担が大きい。人手不足だから無理」は職員の困りごと。

嚥下、咀嚼、姿勢などの身体面から「利用者が食べられない理由」を考えるのではなく、多職種で利用者の気持ちを考えてみる。そうすれば、分からなかった利用者が見ている世界が見えてくる。

生活支援員の経験と、リハビリ職などの視点を加えて利用者を「丸ごと」捉える。職員の価値観を押し付けず、利用者の「見ている世界」と「ねがい」を基に考えてみる。

リハビリ職が指示してやらせるのではなく、多職種連携で一緒に「やってみて考える」。そうすると職員の対応力が上がり、今

まで困難で無理と考えていたことが、解決に向かって一歩踏み出す。

まだまだ微力なりハビリ委員会の活動ですが、多職種連携を通じて利用者の「いのち」だけでなく、「ねがい」を大切にしたい実践に取り組んでいきます。

ゆたか希望の家 所長 倉地伸顕

今回掲載しました「良浩」さんのお名前は実名です。執筆者の意向を踏まえ、ご家族の同意を得て表記させて頂きました。



「食べたい〜」 その気持ちは変わらず

2
10
SAT
職員研修開催

2月10日、今年度2回目となる職員研修が、名古屋国際会議場を会場に、約150名が参加し開催されました。内容は10月に引き続き、「ゆたか福祉会の50周年を共有し、受け継ぐべき財産を今後につなげる機会」として企画しました。午前中は理事長挨拶後、3月に判決を迎える優生保護法裁判の訴え、「リサイクル事業の歴史と発展とSDGs」と題しての報告、午後は7年ぶりとなる分科会が5つのテーマで行われました。以下、内容を紹介します。

午前

旧優生保護法裁判の訴え

当日は原告として提訴された長嶋夫妻と、裁判を支援する「あいち聴覚障害者センター」中嶋氏にお願いいただきました。

ご夫妻からは、旧優生保護法下において「子どもを産みたい」という当たり前の思いや家庭を営むことを制限され、人権を侵害されてきたことについての憤り、中嶋氏からは、自分も含め原告が顔を出すことにより、差別や批判など様々なことがあること、それにも負けず闘っている原告の思いが話されました。

今回ご夫婦が、法人の集会で職員

に対面でお話し頂いたことに、お二人の決意を感じました。より一層、裁判の重要性を知り、これからも運動に取り組んでいきたいと思えます。

ゆたか生活支援事業所尾張 大田 哲嗣

リサイクル事業の歴史と発展とSDGs

まず、リサイクル事業の出発の経緯を紹介しました。

毎日ごみを整理していただいている保健委員さん達が「埋立地がなくなる、どうしよう」「まだ使えるものがいっぱいある」と選別を始めたこと。その取り組みを、「労働組合の課題にしよう」と考え、組合員

さんからゆたか福祉会に「ぜひやりませんか」とお願いがあったこと。

そして、市職労とゆたかか愛障協の3団体で「資源の再利用と障害者の働く場づくりを進めよう」と動き出しました。久屋公園に15,000人が集まった集会が大成功し、「ごみの減量」「リサイクル」「障害者の働く場づくり」は二石三鳥だと市民運動の力でリサイクルみなみ作業所ができたのです。

次に3つの事業所紹介。リサイクルみなみ作業所、資源回収事業部(現トライズ)、リサイクル港作業所の職員がそれぞれ事業内容と変遷、利用者様の様子を動画で紹介しました。

最後になりますが、ゆたか福祉会はSDGsという言葉が使われる前からリサイクル事業に挑戦し、未来の環境のためにできることを追求し、ごみ減量とリサイクルに大きく寄与してきました。

時代と共に容器は変わり、資源の扱いも変わるでしょう。名古屋市環境行政と話し合いを続け、これからも障害者の働く場を守っていきま。仲間たちが「地球を守る仕事」と誇りに感じている仕事です。

リサイクル港作業所 萩原千秋

午後 分科会

働く

この分科会は、第7期作業改善ゼミの第4回目として開催しました。

もともと作業改善ゼミは通年で5回程度、平日の16時半から約2時間、主にオンラインで開催しています。今回はメンバー以外にも幅広い事業所から参加いただき、合計25名の参加者でした。全体説明の後にテーマ学習として、「ムダの削減・動作経済について」「業務マニュアルと作業手順書について」の報告を行いました。

作業改善ゼミの後期報告として、みどり共同作業所からはシート重ね作業の改善、フレンズ星崎からは丁合機の作業改善、リサイクルみなみ作業所からは、転倒事故防止を目標とした改善の内容について発表してもらいました。後半期の報告ということで発表者それぞれの努力が披露され、作業改善ゼミメンバー以外の職員からも多くの発言があり、深い学びの場となりました。

つゆはし作業所 丸山順

リハビリ

分科会では、「職員の困りごと」に着目されがちな現状から、ICFに基づいたリハビリアセスメントの手法を用いて「利用者の困りごと」を明確にする手法を学びました。

職員が利用者の身体機能低下を全て介助するとなると、体を動かす機会が減り、より身体機能が低下するだけでなく、職員主導の生活となり次第に意欲低下に繋がっていきます。

リハビリアセスメントでは、利用者本人が出来ること、出来ないこと、やりたいこと、やりたくないことを分析し、本人がどのような生活、活動への参加をしたいのかを明確にします。

事前アンケートでは、「利用者の対応に困っている職員」の姿を中心に記述されていましたが、グループワークを通じて「本人がどうしたいのか？」が次第に明確になりました。今後、「事業所とリハビリ委員会がどう連携していくか？」が共有できました。

ゆたか希望の家 倉地伸顕

強度行動障害のある人の理解

「根拠に基づく支援」と「チームアプローチ」を中心にミニ学習企画を担当しました。支援は思い付きや勘ではなく、チームで共通の枠組みを共有し、考え、実施していくことが大切です。

職員間で視覚的に共有しやすい媒体として、行動の目的や背景を探るために活用できる各種アセスメントシート、仮説を立てる際に用いる「氷山モデル」等の紹介をしました。また「支援手順書の作成」や「支援の継続実施」「記録からの振り返り」「支援手順書の修正」といった支援で重要とされるPDCAサイクルについての確認も行いました。行動改善ではなく「より深い利用者理解や想いや願いに寄り添いゆたかな生活に繋げること」が最終目的です。

実施する際に課題となる「中核的人材の育成」や「体制作り」、実施後の職員や事業所への効果も含めて報告をさせていただきました。

ライフサポートゆたか 早勢滋

高齢期

高齢期を迎えて、いま生きがいを求めて作業所で活躍したり、ホームでの生活をしている仲間が、突然前触れなく体調を崩し、一気に介護が必要になったり、医療が必要になったりと、生活が一変する状況が発生し急な対応を求められることがあります。

今回の分科会では一人の仲間を支えるときに様々な職種の人や立場の人が、どうしたら足並みを揃えて同じ方向を向いて「その人生を支えられるか」を考える過程を考えました。食と健康委員会からの希望の家の食事の発表や、希望の家からの看取りの話聞いて、コンセンサスに大切なこと、そのために必要なことは何かをKJ法を使ってグループワークを行いました。多くのグループが、「仲間の思いを大切にし、それをどうしたら形にできるのか」という視点」がコンセンサスに繋げる大事な視点であると共通していました。

ケアサポート宝南 岡山加代子

家族と職員で語る

「じぶんがたり〜していますか〜」

「久しぶりに職員と話ができて本当によかった！」の声が多かった2023年9月の保護者連合会研修会。しかし、職員と本音で語り合えていない現状と「忙しそうな職員に話しかけられない」ジレンマが共通して見受けられました。

今回、職員からは9月研修会で出された親・家族のねがいのまとめを報告し、お一人のお母さんから報告をお願いしました。「子らと歩んだストーリー」を通して「思いを聞いてもらっただけで、気持ちが解放されたことが転機であった」ことなどをお聴きしました。

後半はグループに分かれ、「私も子育て大変だったこと、思い出した!」、職員からは「もっと親の方と話していきたい」等、今後に繋がる前向きな対話が繰り広げられました。

あらためて、ゆたか福祉会とは「仲間・家族・職員」が共に障がい・高齢当事者のくらしを「ゆたかに」していく「事業体・運動体」であることを認識しました。

ゆたか相談支援事業所どうとく

丸山京子

分科会全体会

分科会終了後、全体会場に集まり、各分科会の報告を担当者より行いました。限られた時間ではありましたが、各分科会で掲げたテーマに対して、実践報告や意見交換を活発に行い、深める事が出来た事が共通して報告されていました。

特に「家族と職員で語る」分科会では、「家族と利用者が高齢化の中で、改めてゆたか福祉会に対する期待を感じた」「家族の集まる機会や、学ぶ機会の必要性を感じた」「今後も家族が交流し、話し合う場が欲しい」等の意見が紹介され、印象的な報告でした。

また日々の対面での分科会という事もありますが、「改めて顔を突き合わせて、語り合う事の重要性や意義を感じた」との意見も報告されました。

ゆたか福祉会としても、今後このような実践交流や話し合いの場を、継続的に持つ事が大切であると感じました。

ライフサポートゆたか
今治信一郎

研修を終えて

午前中に行われた「優生保護法裁判の訴え」は、原告の方から直接お話を聴く貴重な機会となりました。感じた様々な思いをエネルギーに、もう一回り署名活動を広げることができるよう、呼びかけを行いました。

また午後の分科会は、2017年2月に開催した第20回実践研究会から7年ぶりとなる取り組みでした。分科会の企画・運営は、日常の「委員会」活動等と連携する形で取り組み、様々な実態と新たな課題が見えてきました。「家族と職員で語る」分科会では、50名近い参加者があり、双方において関心の高いテーマであることが伺えました。



次年度もより魅力ある研修として「工夫」しながら、職員集会・職員研修を行っていきたいと思います。

研修部長
向幸子

アンケート(抜粋)

◆優生保護法裁判の訴えを聴いて感じたこと

・当事者の声を生で聞けて良かった。
”誰もが当たり前前に感じる社会の実現”にはまだ差別の壁がたくさんあるのだと残念にも思った。(3年未満)
・今まで裁判の傍聴の経験は無かった。今回の話を聴き、自分の中で受け止め方が変わった。(10年未満)

◆リサイクル事業の歴史と発展とSDGsの報告を聴いて感じたこと

・リサイクル事業の歴史が当時の動画や写真があり、よく分かった。成長もみられ、役員に立候補することができた。仲間にあわせた支援がすごい。(5年未満)

◆分科会について

〈働〉

・目標と実績の提示↓達成感↓ふりかえりの必要性↓数値化、業務マニュアル、作業手順書について、ずっと必要と思いつけていたので、納得した。誰が来ても作業できる状態はとても大事だと思う。(年数未記入)

〈リハビリ〉

・リハビリは専門家が行うものと考え方が変わった。その方に関わる全て

の人が協力して行うこと、その方の生活を充実させること、その方の思いを聞いて実現させることがリハビリだと分かった。今後はこの考えをベースに支援したい。(10年以上)

〈強度行動〉

・代替コミュニケーション「温かみのある支援技術」と言ったワードが印象に残った。構造化の有効性は理解していても、行き過ぎた構造化の危うさについての話も学びになった。(10年未満)

〈高齢期〉

・高齢の転換期を迎えその人らしく生きるため、医師に経口摂取が難しいと判断された後の本人に寄り添いターミナルケアをされた実践報告を聞き、どうすれば本人の思いに寄り添い支援していけるか、職員として心の持ち方に感銘を受けた。(10年未満)

〈家族と職員〉

・口頃のやりとりやコミュニケーションについて不満に思う点を率直に伺えた。本人支援と共に家族からの要望や不安に真摯に向き合い事業運営に活かす必要がある。(20年以上)



ワークセンターフレンズ星崎の取り組み

就労移行・定着支援 数年ぶりに企業就職の

勤続表彰を実施



就労して9年目のAさん

就労移行支援を開始して10年が経過し、これまでに23人の企業就職を支援してきました。就労移行支援では支援の一貫として、『就職者を祝う会』、『OBの集い』などの行事を企画してきました。これらの行事は訓練生やOBの繋がりを作り、就職への意欲を高めたり、就労生活を励ますねらいを持っています。今回は『新年会』を開催し、その中でコロナ禍のため実施できていなかった『勤続表彰』を行いました。その一部を報告します。

『新年会』には訓練生を含めて13名が参加し、OB参加の5名の方を表彰しました。

Aさんは就職して9年目。過去に交通事故で足を骨折し3か月間の休職を経験しました。『骨折したときは解雇になると思った。今まで続けられてよかった。健康に気をつけてあと10年は働きたい』と、

骨折した当時の不安と辛さ、これからの抱負を語ってくれました。

Bさんは勤続年数が一番長く、2024年4月で10年になります。今も就職した当時と同じ作業内容で働いています。『上司は変わったけれど、作業内容が同じことだから安心して仕事ができる』と力強く語ってくれました。

今回、企業で働き続けている仲間たちの話を聞き、「多くの企業が仲間たちのことを十分に理解していた、だからこそ自身の力を発揮し続けられている」と感じました。もちろんこの大変な時期を乗り越えてきた一人一人の頑張りがあってのものです。

5年、10年と働き続けることは容易ではありません。これからも企業で働く仲間たちを支え、応援していきたいと思えます。

副所長 鈴木拓也

*勤続年数参照
現在も17名が働き続けています

勤続年数	人数
3年未満	6名
3年以上5年未満	1名
5年以上10年未満	10名



表彰状を受け取るBさん

就労移行支援

実践報告会

2月14日(水)、昨年度に引き続き2回目の開催となる就労移行支援現場の実践報告会を開催しました。事前にゆたか福祉会の各事業所に声を掛け、利用者7名、職員3名、あわせて10名の方々の参加がありました。

当日はまず、就職を目指して頑張っている利用者の方から「どのような訓練を取り組んでいるのか」を説明させていただきました。また実際に就労移行の利用を経て就職をされた方へのインタビューや、サービス利用から就職後までの支援事例の発表、就職に向けたワンポイントアドバイスなどを行いました。実際の仕事については、映像や写真を用いて紹介し、仕事の内容や職場の雰囲気も一定感じ取る事ができる機会になったと思います。

ゆくゆくは就職を目指していきたい気持ちがあしでもある方は、今回のような報告会を定期的に開催していきますので、お気軽にご参加ください。

2024
1.1

能登半島地震

この「声」を

届けよう！

ロービー掲示板を活用

〜メッセージでつながる〜

リサイクル港作業所

年明けの出勤日、利用者の方が新聞を広げ「ゆれたね！こわいね」とつぶれた家や裂けた道路を指さし話していました。作業所の地盤は-0.7mです。「太平洋側で同じ規模の地震が発生したら」等々、様々な思いが巡りました。

ロービー掲示板に新聞の切り抜きを貼り、「この地震で考えたことを書いてください」とペンを吊るすと、大勢の方が書いてくださいました。珠洲市に親戚がいる職員はすぐに電話し「全員無事だった」とのこと、仲間たちの声に「ありがとう」と書き込まれました。

若手職員から募金活動やメッセージを届ける提案がありました。



自宅で揺れを感じた職員は、咄嗟に玄関と窓を開け、逃げ道を確認。日頃の避難訓練の成果を実感しました。マンションの1階に住む職員は、グラツと来た瞬間すぐ外へ逃げましたが、「石川県並の揺れだったら逃げるのができたか」と率直な感想が綴られました。

地震後災害備蓄を一部見直ししました。現地の日も早い復旧をお祈りしながら、僅かですが募金をお送りさせて頂きました。

所長 萩原千秋

今、自分たちが出来る事を

ゆたか生活支援事業所みどり

2024年1月1日に起こった能登半島地震。多くの尊い犠牲と、依然として大変な避難生活を強いられている方々に、改めてお見舞いを申し上げます。

自分自身も1月1日はホームで勤務しており、震度4ではありましたが、かなり揺れて怖い思いをしました。能登半島の皆さんは、もっと大きな揺れと津波等の恐怖にさらされたことを思うと胸が痛む思いです。

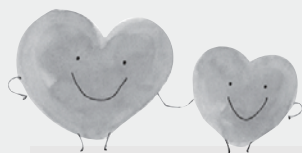


事業所ではまずは「募金」の取り組みを行い、少しでも復興支援に協力できればと思います。職員やホームで暮らす仲間たちからも、「自分たちでできる事をやろう」「少なから募金もできるからやりたい」という声が増えてきます。その声に応える為にも引き続き、募金の取り組みを頑張っていきたいと思えます。

一刻も早く支援に入りたい思いはありますが、現地の状況や要望等をきょうざれんを中心に調査をしている状況です。その調査が終わり次第、支援員を派遣できる体制を事業所一丸でつくっていきたく思います。

全国の障害分野で働くみなさんと「大変な時には助け合える」そんな関係を作っていきたいと思えます。

所長 石田誠樹



りらく作業現場での取り組み

ゆたか作業所

元旦に起きた能登半島地震。「すごく揺れて怖かった」など仲間のみなさんからも話題が出されています。りらく作業現場は、今年度の4月に新しく立ち上げた現場で、車いすの方も3名在籍しています。あらためて備えることの大切さを感じ、作業所全体でも行っていますが、津波を想定した避難訓練を現場で2月1日に行いました。

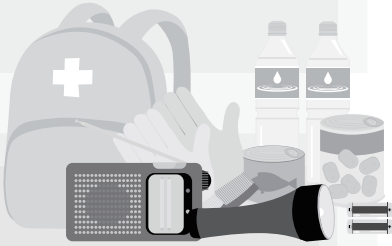
地震発生が告げられると机の下に隠れたり、防災頭巾をかぶったりしました。その後、普段使っていないベランダから屋上へ。麻痺のある方や慣れない場所で大丈夫



かと思いましたが、4分で屋上に避難することができました。

また車いすの方は、階段昇降機に移乗していただきました。移乗へ抵抗があった方、緊張した面持ちの方と様々でしたが、何とか無事4Fに避難できました。「こんな時にはどうする?」と今後も仲間みなさんと話しながら備えていきたいと思えます。

主任 佐藤真代



明日あるかもしれない

緊張感をもって

避難訓練の取り組み

リサイクルみなみ作業所

12月28日、工場1階機械室からの出火を想定し、2階の作業現場から階段を下り外へ避難する火災避難訓練を行いました。階段での移動が難しい身障の方はベランダへ避難。普段職員が作業中に使用しているトランシーバーを使用して外とベランダで連絡を取り合い、安否確認をしました。停電した場合も使用できるよう練習していま

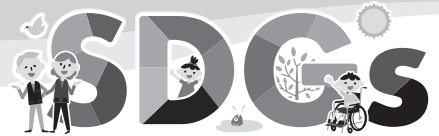


す。消防への通報訓練も行い、ベランダの避難者についても伝えました。的確に火災の状況を知らせるため緊張して取り組みました。

2月16日は、地震避難訓練を行いました。地震後、津波が来ることを想定し、頭を守りながら作業現場から2階食堂へ移動しました。逃げ遅れた人の館内搜索と救助も取り組みました。ここでもトランシーバーを活用しました。能登半島地震の映像から、長く避難所生活を続けている人がいること、いざと言う時どう身を守るかを考えあいました。避難時の行動として「おはしも(おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない)を意識し、「落ち着いて行動しよう」と確認しています。

所長 大野歌織





の目標をめざそう

～はじめた その10
学びや取り組み～

リサイクルみなみ作業所

文集に想いを載せて

リサイクルみなみ作業所では、40周年を迎えるにあたって、設立当初からの歴史を振り返りました。そして学びながら「30周年からの10年間をまとめていこう」と、「記念誌」と「仲間の文集」を作成しました。

編集にあたってテーマを編集委員で話し合いました。「障害のある仲間の皆さんが、これからも生き生きと働き続けられる場にしていきたい」「今後も資源を大切に、環境保全に役立つ仕事を担っていききたい」「平和でなければ障害のある人たちの生活は守られない。戦争は無くなってほしい」などの思いが出されました。

集合写真にはそのテーマを取り入れ、『SDGs』を人文字にする事になりました。大判サイズの色紙を使い、仲間たちで大きな折り鶴を折りました。撮影当日は、折り鶴を並べ、皆で鶴と鶴の間に並び、バランスを調整しながら人文字を創りました。

「捨てればゴミ」になってしまいうペットボトルやプラスチックは、海へ出てしまうと海洋プラスチックになり、生態系への影響も問題になっています。現在では年間約2,500tのペットボトル（異物を含む）を分別し資源化する私たちの仕事は、埋め立てを減らし、藤前干潟等の自然環境を守る一翼を担ってきました。

『17の国際目標』は、日々の生活に密接に結びついた内容となっています。私たちの担っている仕事そのものが、「誰一人取り残さない持続可能な多様性と包摂性のある社会の実現」を目指した取り組みであり、ひとり一人がその主体者なのだと思っています。

所長 大野歌織

ベトナムの文化を知ろう!

今月のベトナム 豆知識

日本語の漢字は、もともと中国から伝わってきたものです。同様に、昔のベトナムでも中国からの影響で漢字が使われていました。

- 同意 どうい đồng ý (ドンイー)
- 意見 いけん ý kiến (イーキエン)
- 管理 かんり quản lý (クアンリー)
- 感動 かんどう cảm động (カムドン)
- お茶 おちゃ trà (チャー)

ベトナム語と日本語は、中国から来た言葉を多く使っているから似たものがあるよ!



例として
5つ紹介するね





1月

- 10日(水) 法人安全衛生委員会
- 12日(金) 新所長研修
- 15日(月) 事業運営推進会議
- 18日(木) 所長会議
- 19日(金) ふれあい共同作業所
名古屋市指導監査
- 24日(水) 副所長会議
- 25日(木) 広報・ホームページ編集委員会
- 26日(金) 「まとめ研修」/
きょうされん経営管理者研修
(~27日)
- 29日(月) 研修部会議



一般寄附(1月)

宗教法人明拝教会

順不同敬称略

賛助会員新規加入者・更新者(芳名一覽)

(1月12日~2月3日 手続き分)

順不同敬称略

森 重徳
渡辺 善之
渡辺 善之
渡辺 善之
伊藤 智恵子
島山 由美

ブロン電機(株)
渡邊麻衣子



表紙の作者紹介「さくら」

有馬さんは日中「みらいろ」で、仕事に取り組みられています。12月から「まーぶる」に入居され、職員や仲間に食べ物や旅行に行った話など、様々なお話をして下さいます。

今回、広報誌の表紙を募集している話をすると「桜の絵が僕、得意だぞ!!」とおっしゃり、10分ほどで描き上げて下さいました。表紙になることをお伝えすると、「楽しみだな!部屋に貼らないと!!」と大変楽しみにされています。

これからも大好きな絵をたくさん描いて、皆さんに見てもらう機会を作れるといいなと思います。



まーぶる 有馬 清高さん

広報・494号

2024年3月号(2024年3月10日発行)

定価1部200円

法人協会員・賛助会員は会費の中に購読料を含みます

発行・編集 / 社会福祉法人ゆたか福祉会

印刷 / 株式会社東海共同印刷

法人協会員費・賛助会費・寄附金など福祉会への申し込み、ご送金は

法人協会員費 = 年間1口6,000円、
賛助会員(個人1口3,000円、企業団体等1口5,000円)

●銀行口座 名義はいずれも社会福祉法人ゆたか福祉会

・三菱UFJ銀行 柴田支店 普通預金 291-884
・中京銀行 鳴海中央支店 普通預金 150-425

●郵便振替口座 00820-8-54026 社会福祉法人ゆたか福祉会

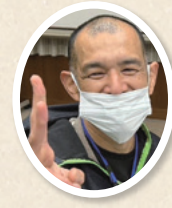
その人らしく働く暮らす

Vol.116

仲間

「これからも理想の暮らしを支えて」

ゆたか生活支援事業所あつた 中野鉄也さん



中野さんは2001年からゆたかホーム太陽へ入居され、同年にリサイクル港作業所に入所されました。それまではゆたか希望の家に3年、ゆたか通勤寮を2年利用していました。

今年4月で55歳を迎えられる中野さん。旅行・お出掛けなどの余暇活動が大好きで、ホームの仲間や職員と一緒に県外旅行に行かれたり、一人で大阪を観光するなど楽しまれています。

しかし2020年より、コロナウイルス感染拡大の影響で外出制限がかかり、旅行に行く機会がなくなっていました。そして現在、感染症も5類となり、ずっと我慢をされていた「ホームの仲間と一緒に旅行に行きたい」という目標を立てられました。

目標を実現するため作業所を休まず通所され、給料が上がる

よう、様々な仕事にも意欲的に挑戦されています。

「ご本人の今後の願いとしては「ホームの仲間とずっと仲良く生活したい」という気持ちがあります。

ホーム太陽での生活が始まって23年。本当の家のように過ごされています。少しでも長く穏やかな生活が続けられるように、これからも中野さんの気持ちに寄り添って、日々の生活を支えていきたいです。

川松亮太



空びんの色選別作業～集中して～

職員

「1年経ったいま」と

これからの目標

みらいろ 小林稜汰



2023年度4月にゆたか福祉会に入職し、早くも1年が経とうとしています。当初は

不安なこともたくさんありましたが、頼りになる先輩方に支えられ、後半期からは「じよぶ班」の責任者として現場を担当することになりました。

これからは2年目職員になりますので、より様々なことに気付き、実践していきたいと考えています。この1年間で「じよぶ班」の仲間についてたくさん知ることが出来ました。今後はさらに仲間たちと一緒に過ごしている事に気付き、支援につなげていきたいと思っています。

「じよぶ班」は主に軽作業をして一日を過ごします。仲間が自立してできる作業が望ましいですが、時には難しいものがあります。そのときは、周りの職員と相談し、試行錯誤しながら進めます。色や数字を使った提示の工夫や、ボランティアの方と相談し、治具の作成を依頼するなど様々なことに取り組んでいます。

また、実務など仲間との関わり以外のところでも、自ら気付き、行動していきたいです。もう少し先の目標として、資格取得も視野にいれ、実践の中での感覚だけではなく、確かな知識を得てより良い支援ができればと思います。

難しさを感じることも多いですが、仲間が新しい作業に取り組みることができるようになったとき、楽しんで作業をする姿が見られたときは、それ以上の喜びを感じることが出来ます。現在の自分にとっては、それが一番のモチベーションです。

この1年間で様々なことを学び、支援の楽しさもたくさん感じる事が出来ました。今後はさらに、職員や仲間、ボランティアの方からも信頼される職員になれるように力を付けていきたいです。



茶の実の選別作業を支援